

I サムエル 23 章「主の守りの仕切り」

何か特別な出来事がある、主の導きや守りを実感して、感謝して主を賛美することがあるでしょう。そのような経験を通して分かるのは、特別な時だけでなく、いつも主が私たちを導き、守っていてくださるということです。あるいは、この苦しみがいつまで続くのかというような中であっても、主の導きと守りがあることを知ることができるのです。

1. ケイラの救出 (:1~14)

22 章に記されているサウルが祭司の一族を皆殺しにするという事件が起こっていた頃、ダビデに一つの知らせがありました。「今、ペリシテ人がケイラを攻めて、打ち場を略奪しています」という情報です。せっかく収穫した穀物をペリシテ人がやって来て略奪していたというのです。

それを聞いたダビデはペリシテ人の手から救うべきだと思ったのでしょうか。それでも個人的な正義感だけで行動するのではなく、そのことについて主に伺いました。2 節。おそらく、この時ダビデは預言者ガドを通して主に伺ったのでしょうか。示された主のみこころをダビデが部下たちに伝えると、彼らは言いました。3 節。部下たちの意見は否定的でした。

そこでダビデはもう一度、主に伺いました。主の答えは同じでした。この態度から教えられます。部下たちの意見は否定的でしたが、ダビデはその意見に流されませんでした。それは彼が主に目を向けていたからです。それでダビデはもう一度、主に伺い、それに対する主の答えと主への信頼をもって部下たちを説得し、励ましたのでしょうか。ペリシテ人を渡すとの主の約束を信じて、行動を起こしたのでしょうか。そうして彼らはケイラに行き、ペリシテ人と戦いました。家畜を奪い返し、ペリシテ人に大損害を与え、ケイラの住民を救いました。主のことば通りになりました。

主のみこころが示されているなら、否定的な意見に流されずに、状況にではなく、主に目を向けて、みこころに従うことができるようにと教えられます。ただし自分の願いのみこころであると思いついてしまうこともあり得ますので、もう一度主に伺う必要があるでしょう。それでも変わらずに確信が与えられるなら、主への信頼を分かち合って、進んで行くようにと教えられます。

一方、ダビデがケイラに来たことはサウルに知らされます。それを聞いたサウルは言います。7 節。ケイラには城壁と門があったようです。その中にダビデの集団が入ってペリシテ人を追い払ったのですが、その町を包囲すればダビデたちを町の中に閉じ込めることができます。そして、この状況を「神は彼を私の手に渡された」と言いました。サウルはダビデを殺したいという自分の願いを、神が承認されたと考えました。しかし、サウルが自分の都合の良いように神を利用していることが分かります。

ダビデは、サウルが兵を招集していて、自分に害を加えようとしていることを知りました。ここでもダビデは、自分がどうすべきかを主に伺います。ただし、今度は別の方法で主に伺います。ダビデのところへ逃げたエブヤタルがエポデを携えていました。大祭司のエポデには特別の装飾が施され、胸当てが付いていて、胸当ての内側にウリムとトンミムが入れていました。ダビデはエポデを持って来させ、主のみこころを伺いました。ダビデは主に祈ってから尋ねます。

「サウルは下って来るでしょうか」と尋ねると「彼は下って来る」と答えがあり、「ケイラの者たちは、私と私の部下をサウルの手引きに引き渡すでしょうか」と尋ねると「彼らは引き渡す」と答えがありました。

ダビデが祈りの中で言うように「サウルがケイラに来て、私のことで、この町を破壊しようとしている」ということだったのです。祭司の一族を皆殺しにして、ノブの町を滅ぼしたサウルですから、ダビデを引き渡さないなら町全体が滅ぼされかねません。

それでダビデと部下たちはケイラから出て行きました。それでも彼らに行くあてがあるわけではありません。「そこここと、さまよった」、「荒野にある要害に宿ったり、ジフの荒野の山地に宿ったりした」とあります。ダビデたちはサウルの追手から逃れる放浪生活を続けることとなります。先の見えない不安と不安定な生活が続きますが、その中でも「神はダビデをサウルの手引きに渡されなかった」とあります。神、主はダビデを守っていてくださったのです。

また、ダビデは預言者ガドによって、また祭司エブヤタルによって、ダビデは主のみこころを知ることができるようになりました。このことも主が与えてくださった助けです。

このダビデたちの歩みは私たち信仰者の歩みのようです。神の約束は与えられていますが、そこに向かう途上の具体的なことは分かりません。しかし、一步一步神の導きに頼りながら歩いていきます。聖書によってみこころを教えていただき、祈りの中で導かれます。そして、その歩みを主が守っていてくださるのです。

2. ヨナタンの励まし（：15～18）

放浪生活が続く中、ダビデに励ましが与えられました。ヨナタンが来てくれたのです。ダビデのもとに行くことには危険があったでしょうけれど、ヨナタンの愛とダビデとの契約に対する忠実さが表されています。

そしてヨナタンは神によってダビデを力づけました。ダビデは、自分と同じように神に頼り、神に従って生きる人からの励ましを必要としていました。困難な状況が続いていますが、共に神を見上げ、神を信頼する者同士の交わりを持つことができ、本当に力づけられたことでしょう。

また、ヨナタンは自分が受け止めている神のみこころと導きを語りました。17節。ダビデがサウルの手に渡されることはないこと、それだけでなく、ダビデがイスラエルの王になること、自分は王位継承者であるけれども王になることはないことを受け入れています。そして、父サウルもそうなることが分かっていると言います。分かっているけれども受け入れることができずに、あがいているのです。

それでもヨナタンは父サウルに対しても誠実です。このことばの最初と最後に「父サウル」と繰り返しています。父の状態を受け止めつつ、父との関係を断つのではなく、従い続けていることが分かります。

こうして二人は契約を結びました。以前と同じように主を証人として、主の前で契約を更新しました。このことはダビデにとって本当に励ましとなったことでしょう。

私たちはヨナタンの態度から教えられます。愛を表して関わり、共に神を見上げて信頼し、神のみこころと導きに委ねることで、兄弟姉妹に励ましを与えることができるのです。立てられている方たちを批判するのではなく、置かれている立場で主に仕えていくのです。

3. 主の守り（：19～29）

ところが、ジフ人たちがサウルのところに行って、ダビデが自分たちのところに隠れていると伝え、自分たちが手引きをすると申し出ます。ジフはユダ部族に属していますが、ダビデのことを歓迎していなかったようです。

このことを後で知ったダビデが歌った詩篇54篇を開きます。表題にIサムエル23章の出来事のこと話が語られています。1～3節。ダビデは救いを求めて神に祈っています。3節でジフの人たちのことを言っています。しかし、ダビデは主への信頼を告白することができました。4節。

ジフ人から情報を得たサウルは喜びます。「主の祝福があなたがたにあるように」と言いますが、自分の都合で神、主の御名を用いています。「あなたがたが私のことを思ってくれたからだ」と言い、自分のことが中心です。そして、ダビデの居場所をよく調べて、知らせたいと求めます。こうしてジフ人たちの手引きでサウルの軍勢がダビデを捜しに行きます。

24節から26節に、サウルの軍勢の動きとダビデの集団の動きが交互に書かれています。マオンの荒野で、一つの山の一方の側をサウルの軍勢が進みます。その山のもう一方の側をダビデの集団が急いで逃げようとしています。ダビデにとって危機的状況です。

しかし、そのときにサウルの軍勢が引き止められました。27節。この知らせによって、サウルはダビデを追うのをやめて、ペリシテ人のほうに向かうことにしました。間一髪のところ、主が守ってくださいました。

この出来事がある、その山は「仕切りの岩山」と呼ばれました。神、主がダビデとサウルの間を仕切り、ダビデを守ってくださったことの記念となりました。

私たち一人ひとりも主の御手の内にあります。主が一人ひとりを選び、救いに導き、主の民として導いておられます。それぞれの歩みを主が守ってくださいます。時には、危機一髪のところでも守られることもあります。そのような経験を通して、いつも主の力強い導きと守りがあることを知ることができるのです。そうして、主のご計画が行われていき、主の栄光が表されるのです。

私たちも一步一步主の導きに頼りながら歩いていきましょう。主が約束された天の御国に至るまで、その途上をどのように導かれるのか分かりませんが、みことばによって教えられ、祈りのうちに導かれ、主の守りを信頼して進んでいきましょう。

また、苦難を経験している兄弟姉妹に対して、愛を表して関わり、共に神を見上げて、分かち合い、祈りましょう。

そして、主に守っていただいたことを証して、それゆえにいつも、どのような中にも主の力強い導きと守りがあることを信じて、日々生活していきましょう。